

「マイカブト」～カブトムシってどんなところで育つの？～
学校法人峰学園 すぎの子幼稚園・社会福祉法人峰悠会 おおぞら保育園

(群馬県桐生市) [5歳児]

本年度(11年度)、創立30周年記念事業として、クヌギの木々を囲んだ昆虫ハウスを建設し、子どもたちの提案で「かぶちゃんハウス」と名付けた。「科学する心」が生まれることを願い、5歳児中心の「カブトムシ」との触れ合いに注目した。

＜昆虫王国にて・腐葉土作り～落ち葉集め～ 4月5日＞

3月に昆虫王国に行き、王国のカブトムシの幼虫のために、腐葉土作りを体験する機会があった。それから1ヶ月ぶりに同じ場所に来た子どもたちは、昨年の活動を思い出し、再び落ち葉集めを行うことにした。熊手で落ち葉を集める子、袋を持って落ち葉を袋に入れて運ぶ子に分かれて活動を進める中…。

A児:「なんか、いっぱい枝が混ざっちゃってるよ!大丈夫かな?」

B児:「でも、別にいいんじゃない。枝も一緒に入れちゃおうか?」

A児:「えーでも、葉っぱじゃないよ。入れちゃっても平気なのかな?」

C児:「うーん、わかんない」「あっ!でも枝があれば出てきたときに枝に登れるんじゃない?」

A児:「でも、幼虫は登れないよ。枝があると邪魔になるんじゃない?」

保育者:「どうしてA児君は邪魔になると思うの?」

A児:「幼虫は枝を食べないし、土の中で潜っているから枝に登ったりしないと思うよ」

保育者:「そうかもしれないね」A児・D児・B児:「これは大丈夫かな?」

枝の大きさや固さなどを見ながら、落ち葉を集めていく。



＜昆虫王国にて・マイカブトへ 4月27日＞

幼虫を飼うために必要な物は何かなど、家庭で調べてきた子どもたち、それらの情報を伝え合い共有した。このことは、オスやメスの見分け方についての興味へと繋がった。昆虫王国に向い、自分で幼虫を探し飼うことになった。それぞれ、「オスがいい」「卵を産むからメスがいい」など幼虫を選ぶということに期待を持ち、話が膨らんでいく。

D児:「あっ!カラスの音が聞こえる。狙っているのかも」「カラスに見付かって食べられちゃってないかな?」

園ではよく、カラスによって幼虫が食べられてしまっていたため、実態を知っていた。

「あぁ～よかった。いたいた!!」

保育者:「Eちゃん、オスとメスの見分け方を調べてきてくれたよね」

E児:「お腹のところに三角があったらオスです」

それを聞いて、子どもたちが自分の幼虫を真剣に選び始める。

A児:「先生、これ三角だね?やったあ、オス見つけた!」



＜“なんだろーかん”にて・飼う場所はここでいいのかな? 6月14日＞

春に苗を植えた野菜が収穫の時期を迎えた。きゅうりが初めて実り、“なんだろーかん”にて食べていると…。

子ども:「ねえ、この中にずっといるカブトムシって暑くないのかな?」

保育者:「そうだね、いつもみんながお世話に来るときも窓開けてないもんね」

子ども:「きっと暑いよ。ここじゃかわいそうだね」「出してあげたいね」

自分が幼虫と同じ立場になることで、カブトムシの気持ちになって考えることに繋がった。

保育者:「そっかあ。じゃあどこに出してあげたらいいかな?」

子ども:「なんだろーかんの外」「靴置き場」「クラス」「園庭」

F児:「でも、外に出すとカラスとか鳥に見付かっちゃうよ」

子ども:「そうだった。どうしよう」保育者:「どこか、鳥さんが入れない場所ないかね?」

G児:「あっ!かぶちゃんハウスの中は?あそこなら網があるから鳥が入れないんじゃない?」



＜その後＞かぶちゃんハウスに屋根がないことを心配した子どもたちは、傘を差して置いておくことにした。

また、さらに暑くなると、子どもたちは、気温を気にかけるようになり、気温を計って、より温度の低い場所を考えて飼育ケースを置くようになった。やがて幼虫はサナギとなり成虫となった。子どもたちは、観察や世話をより楽しみにするようになり、カブトムシの立場に立って気持ちを考える姿が多く見られるようになった。

(みどころ) 一人ひとりの子どもたちが腐葉土作りをきっかけにカブトムシが成虫になるまで育てる過程では、カブトムシへの興味を深め、カブトムシの立場になって考えるようになるなど「科学する心」が生まれていることが分かります。園内外の自然を十分に活かし、子どもたちの興味・関心を捉えた環境作りや、友達や保育者・保護者などが情報を共有する関係作りなど、物的にも人的にも環境の工夫が図られています。